

『『偏見』への不安と『応援』、両方を味わった学生時代』 安齋秀喜

2011年3月11日。それは、中学の卒業式を終えて帰宅し、母と卒業祝いの携帯電話を買うために町へ向かう途中で起きました。車を運転していた母は地震を察知して急停車、僕はその助手席にいて、目の前のアスファルトに亀裂が走り、割れ目が広がって道の先まで伸びていくのを目撃しました。車を止めた場所は山沿いで、この山が土砂崩れを起こすのでは、という恐怖に襲われたのを覚えています。

電気ガス水道は止まりましたが、家も家族も無事でした。異変を感じたのは、地震の数日後、福島県沿海沿いの地区から、僕たちの町につながる道、さらに内陸へと向かう道で、今まで見たこともないような大渋滞が発生し、その車列にはどこか不穏な空気が漂っていました。

福島第一原発が制御不能、高濃度放射線が拡散、というニュースが流れたのは、その大渋滞を目撃した直後。あの車列は、原発事故からの避難だったのです。すぐに家族会議が開かれ、姉（高校を卒業し4月から専門学校に進学予定）、僕、弟（小学校を卒業し中学に進学予定）の3人が、隣県の群馬県にいる親戚宅へ避難することに。これからどうになってしまうのか、両親・祖父母と離れ、心細い気持ちで過ごした1週間。放射線の数値は毎日報道されましたが、二本松市内と群馬の親戚宅の周辺は放射線の数値がほとんど変わらないことが分かり、3人それぞれに新学期の準備もあるので、自宅に帰ることになりました。

4月から福島市内の高校で、予定より少し遅れた新学期が始まり、クラブ活動で選んだのが青少年赤十字（JRC）です。震災発生直後、苦しんでいる人がたくさんいて、自分は体力も時間もあるのに助けてあげることができない・・・もどかしい思いを抱いていた僕には、JRCの奉仕活動は願ってもないものでした。

JRCに入部1年目、震災があった年の秋に、福島県内のJRCメンバーが100人くらい集まり、福島の農産物の風評被害の払しょくのため、東京都内でPR活動をしました。僕のチームは二子玉川の駅前で福島産の梨を配布。もちろん、残留線量は測定済みです。正直、東京で福島産の農産物を配ることでのどんな拒絶反応があるか、配り始めるまで不安だらけでしたが・・・大きな声で安全性をアピールしながら梨を入れたビニールを差し出すと、予想外のことが。ほとんどの方が「応援しているよ」「頑張ってるね」と、温かい言葉と共に梨を快く受け取ってくれるのです。

胸がいっぱいになりました。そしてその時の経験をもとに書いたのが、この作文です。

今、社会がコロナ禍に見舞われていますが、僕の目には震災直後の、放射線という見えないものを恐れていた時と社会の状況が重なって見えます。



東京で梨を配った時は多くの人の応援に触れることができました。しかし高校時代にずっと感じていたのは、福島に対する社会の偏見の目と、これが将来も続くのだろうかという不安。僕は、新型コロナに感染してしまった人たちのことが心配です。感染したと周りに知られたら、家族に迷惑を掛けてしまう、感染した人だってつらいのに、恐怖の元凶のように見られてしまう・・・。どれほどの不安の中で過ごしていることでしょうか。放射線も、新型コロナも、正しい情報だけを見て冷静に対処すれば、こんな差別は起こらないはず。社会から、こういう偏見がなくなり、感染した人たちの気持ちが軽くなることを願っています。

震災から10年。僕は今、神奈川県内にある発達障がい児の通所支援施設「スタジオそら」に勤務しています。奉仕活動をしたいと入部したJRCで、子どもや障がいのある方も接したことが、この仕事に興味を持つきっかけになりました。発達障がいを持った子どもたちは、障がいのない子たちが当たり前に行えることが、なかなかうまくできません。しかし、成長していくにつれ「他の子ができることが、自分にはできない」ということに気づき、つらい思いをします。自信を失って生きるのは苦しいことですが、逆に、できるようになったと、達成や成長を感じられるのは幸福なことです。僕は、子どもと一緒に達成感を味わい、その子が幸せな気持ちになれることが嬉しい。

この仕事は、一人ひとりタイプの違う子たちの、それぞれに必要なことに「気づき」「考える」ことが大切。それって、まさにJRCで繰り返しやっていたことでした。ある子どもとのトレーニングの一環として「果樹園ゲーム」をやった時（それは“動物が来る前に果実を収穫しよう”というゲームなのですが）、ゲームの目的である「動物が来る前に果実を収穫すること」には成功するけれど、守った果実を動物にあげる、そんな独自のルールでゲームを進める子がいました。その子は、「動物に果実を食べさせてあげたい」という思いで、むしろ喜んで動物に果実を与えます。・・・それはゲームのルールからは外れていることかもしれませんが、でも、結果としてその子が幸せになるなら、それも正解だなと。社会においても大切なヒントが、そこにある気がします。僕も日々、学ばせてもらっています。